「際」について

孫　江

「際」という漢字は、本来、壁と壁の間の隙間を意味する。そこから「際」の空間的・時間的意味合いが生まれる。空間的な意味での「際」は、「国際」、「学際」のように二つのものの間の距離を指し、時間的な意味での「際」は、「際会」、「今際」のように「時」や「モーメント」を指す。現代中国語と日本語の「際」の使用例を比較すると、日本語のほうが圧倒的に多い。

今年一年間、私は外国人研究員として国際日本文化研究センターを訪問している。日々過ごすなかで、よく目に入るのが「国際」の二文字である。今日の意味で使われている「国際」は一九世紀半ばに作られた言葉である。それまでは「万国」という語がよく使われていた。箕作麟祥訳『国際法　一名万国公法』の序文に、「仔細ニ原名ヲ考フル時ハ国際法ノ字允当ニナルニ近キカ故今改メ国際法ト名ク」、と「万国公法」を「国際法」に改めた理由が述べられている。地理的空間であれ、文化的空間であれ、自分の研究を「国際」という空間のどこに位置づけるかによって、見えてくるものは大きく異なる。

戦後、ヨーロッパを中心とするこれまでの「世界史」叙述の枠組みを打ち破るため、多くの理論が生み出された。その中で今注目を浴びているのは、中心と周縁、ヨーロッパと非ヨーロッパの二項対立的な歴史叙述を標的とするグローバル・ヒストリーであろう。国民国家の壁を取り払い、ヒトやものの移動に焦点を当てることで、従来見逃されてきた歴史の多くの側面

が浮き彫りにされてきた。しかし、その一方で、グローバル（global）という形容詞が象徴するように、その研究の対象や領域、そして分析の手法は必ずしも確立されておらず、現実に国民国家が存在する以上、グローバル・ヒストリーが目指す新しい歴史叙述は、結局のところ、ヨーロッパ中心的な叙述から脱却することは困難であろう。むしろ自己と他者の距離を確認し、その相互関係に着目するグローカリゼーション（glocalization）――グローバリゼーション（地球一体化）とローカリゼーション（地域化）とが合わさった造語――のほうが示唆的だと感じる。そこで私は、「概念史の文化的転回」を唱え、東アジアにおける近代知の再生産プロセスの解明に取り組んでいる。[二]

概念史研究の最大の眼目は、それぞれの地域や時代の概念を手がかりに歴史研究を行うことにある。ドイツ人学者コゼレック（Reinhart Koselleck）がその代表的人物である。コゼレックは一九七八年秋に来日し、東京で二つの講演を行った。講演記録のうち、一つは翌年に『思想』に掲載され、もう一つは二〇一五年になってようやく同誌に掲載された。[三] このことは日本における概念史やその代表的研究者コゼレックの注目度の低さを物語っている。私の専門はもともと社会史であったが、コゼレックの著作を通して、テキストの言語と構造を重視する「概念史」とテキストの背景を重視する「社会史」が互いに密接な関係を有することに気づき、概念史に関心を持った。ところで、最近はじめて知ったことであるが、日本法制史の大家三浦周行は早くも一九〇四年に「専門学に於ける概念の必要」と題した短文において概念の重要性を唱えた。[四]

コゼレックの弟子に当たるシュタインメッツ（Willibald Steinmetz）は、二〇世紀に形成された歴史的基礎概念に二つの特徴があると指摘した。一つ目は「再帰性」（reflexivity）である。

普遍的な真理は存在しないため、あらゆる概念について再吟味する必要があるという態度である。二つ目は英語化（Anglicization）である。英語はわれわれが他の言語環境で生まれたさまざまな概念を理解するためのフィルターになっている。[五] 思えば、いわゆる「国際化」とは実は英語化である。非英語圏の人びとにとって、英語は他者を理解するための手段であり、また他者に自己を理解してもらうための装置でもある。しかし、その一方で、英語は他者への理解を妨げる可能性をも孕む。なぜなら、他の言語環境に生まれた概念は英語化されることで、その本来の豊穣さを失いかねないからである。したがって、真の「国際化」は英語化ではなく、多言語の間を行き来する「言語横断の実践」（translingual practice）であるべきだろう。[六]

空間的な意味での「際」よりも、時間的な意味としての「際」はより重要な意味をもつ。時間は抽象的概念であるが、場所の変化や人間の行いを通じて具現化される。学問に限って言えば、時間的意味としての「際」は「学際的な研究」という行為によって表されている。近代的学問体系が形成されてから、学問分野によって制限されることを良しとしない研究者は、しばしば学科横断的、すなわち学際的研究を試み、新しい学問を生み出してきた。

二〇〇一年、私は日文研の劉建輝先生が主催した満州研究班への参加をきっかけに、「学際的」な研究を意識するようになった。そして、二〇〇六年に劉先生と一緒に概念史研究班を立ち上げた。私は日本の大学の職を辞して母校南京大学に戻った後も、概念史研究を続けている。現在、南京大学学衡研究院を拠点に、仲間たちと共に二〇世紀の東アジアに影響を与えた一〇〇のキー概念についてこつこつと研究を進めている。今回の日文研訪問の主な課題は、近代東アジアの「人種」・「民族」概念に関する比較研究である。そのかたわら、長年放置していた大本教の研究も、何らかの形で総括しようと考えた。

ところが、二月半ば頃、偶然ながら、一九二〇年五月二二日の『萬朝報』に掲載された「支那の学生運動に参加した注意人物」という記事が目にとまった。それによると、東京地方裁判所検事局は過激思想を宣伝するビラを配布したとして、東京帝国大学の学生である早坂二郎を逮捕した。この学生は「吉野博士」こと吉野作造の紹介状を持って上海にわたり、滞在先で排日学生運動に参加した。当時山東問題で日中両国の政府や輿論が真っ向から対立するなかで、日本の学生がなぜ中国人学生による排日運動に参加したのか。そして、吉野作造の紹介状は誰宛のものだったか。彼はなぜそれを書いたのか。これらの謎を解くため、私は吉野の著作をひも解き、早坂が所属する新人会関係の資料も調べることにした。その中で、新しい「事実」が次々と浮かび上がってきた。ここで詳細を述べる余裕はないが、結論から言うと、一九一九年五月四日に北京で「五四運動」が勃発した後、吉野作造は中国の学生に理解を示した。彼は、ロシアからの過激思想が広がるのを防ぐため、日本の学生は中国の学生に倣って官僚・財閥を打倒し、真の「民主制」を樹立すべきだと考えた。その第一歩として、彼は密かに北京に渡って、かつての教え子である北京大学教授李大釗らと面会し、日中学生同士の「提携」の道を模索したのである。この『萬朝報』の記事との「際」会をきっかけに、私は大正デモクラシーの「行方」に強い関心を持つようになり、「デモクラシーの黄昏」と題した論文を書き上げた。これをベースに一冊の著書にまとめることができればと日々精進している。

二〇世紀末、長い間学問を支えてきた「印刷文化」の衰退により、人文社会科学は厳しい境地に立たされた。イギリス人社会学者ホスキンス（Andrew Hoskins）の言葉を借りれば、我々は「接続的な転回」（connective turn）に遭遇している。[七] 人びとは外出しなくても指で鍵盤を叩くだけで資料や情報を簡単に入手できる。プラトンはかつて、文字の発明は知識の外部化を

意味し、人々の心に「忘却」という種を蒔いたと言った。ＩＴ革命が進むにつれ、知識の外部化は一層加速し、認識の均質化も進んでいる。そこで「生」の実体験を通じて研究を行うことはより大きな意味を持つ。その「際」、われわれは何をしなければならないだろうか。

注

一　陳力衛『近代知の翻訳と伝播――漢語を媒介に』、三省堂、二〇一九年、第八九頁。

二　SUN Jiang, “Transcultural Turn of Conceptual History Research,” *Cultura: International Journal of Philosophy of Culture and Axiology*, 15(2) 2018, pp. 1–11.

三　ラインハルト・コゼレック「学際研究と歴史学」、『思想』一九七九年第三号。同「一九世紀：ひとつの移行期」、『思想』二〇一五年第一〇号。

四　三浦周行「専門学に於ける概念の必要」、『國學院雑誌』第一〇巻第三号、一九〇四年、第一三―一四頁。

五　Willibald Steinmetz, “Some Thoughts on a History of Twentieth-Century German Basic Concepts,” *Contributions to the History of Concepts* 7, No. 2, 2012, pp. 99–100.

六　Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900–1937*, Stanford: Stanford University Press, 1995.

七　Andrew Hoskins, “Media, Memory, Metaphor: Remembering and the Connective Turn,” *Parallax*, Vol. 17. No. 4, Routledge, 2011, pp. 19–31.

（南京大学政府管理学院・歴史学院教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）